

鮮卑の祖先窟の伝達と突厥の祖先窟の伝承

片山 章雄

1. はじめに

5～6世紀の東ユーラシア地域における人流や情報伝達の一例として、5世紀半ば近くには華北をほぼ支配した鮮卑族の原住地に関わる祖先窟の情報伝達の背景やそこへの往復、もたらされた情報とその記録の問題を扱う。記録はどのように扱われ後世に伝えられたか、しかし記録から見えない史実はどうだったか、これらについて、発見された祖先窟の報告から考えてみたい。さらに、1世紀あまり後の6世紀後半、中国王朝が最も関心をもっていた北方ユーラシアの突厥族の祖先窟の情報や伝承があったが、これらはどのように受け止められていたか。7・8世紀における突厥の名や関係情報の日本への伝達についての見通しも含めて考えてみたい。

2. 鮮卑の祖先窟に関する情報と発見、研究史、伝達に関わる問題点

鮮卑の存在は、周知のように後漢の記録あたりから知られるようになっていた。その起源や分布、移動・勢力拡大から華北地域への進出に関する歴史的な問題については、日本においても多くの議論があった（白鳥庫吉「東胡民族考」＝文献2再録、内田吟風「（改題）烏桓鮮卑の源流と初期社会構成」＝文献4所収、他）。また、三国時代については、民族・言語分布の観点からする考察も現れた（文献8）。

検討すべき諸史料に深く関連して大きな注目を集めたのが、1980年7月30日発見と伝えられた鮮卑の祖先窟とされるものだった。それは『魏書』巻100烏洛侯国伝に見える「国家先帝旧墟」、「石室」にして巻108之1礼志の「鑿石」による「祖宗之廟」、「石廟」、「石室」で、烏洛侯国の来朝により知らされ北魏の使者（李敞ら）が赴いたところの、前者では「祝文」を「室之壁」に刻した、後者では「石室」に「祝曰」以下の引用文を刻した、その祖先窟だという。この発見・確定に至るまでには、内蒙古自治区オロチョン自治旗阿里河鎮にあって現地で嘎仙洞と呼ばれている洞窟を、当時のホロンブイル盟文物管理所の米文平らが1979年から1980年にかけて4度調査したという。そしてついに、『魏書』烏洛侯国伝に見える「〔太平〕真君四年」（443年）の文字を含め、礼志所載の文章とほぼ重なる記載が確認されたのであった。この発見について、日本では19

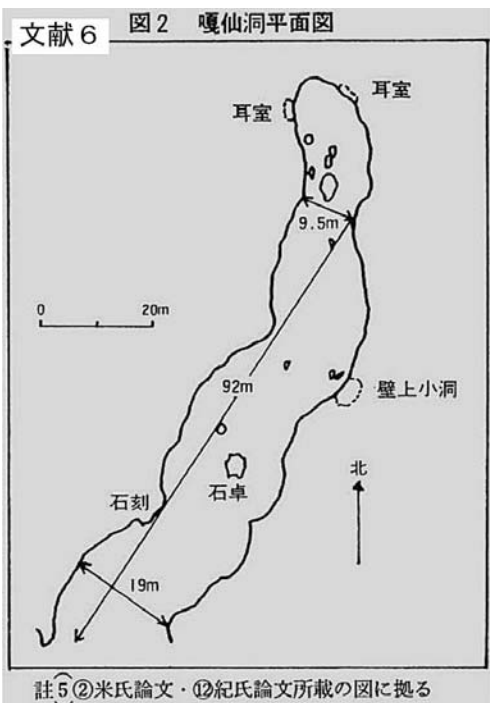


嘎仙洞西壁摩崖刻石

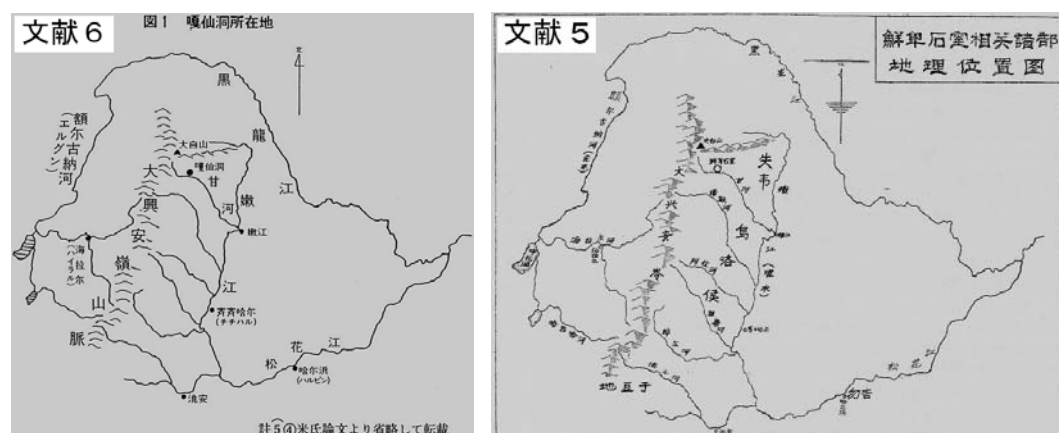
80年後半から翌年にかけて出た新聞記事や学術誌の論文により把握され、1982年には研究動向中で言及されたり、『人民中国』誌1982年12月号の紀成「鮮卑族の謎解ける一大興安嶺で「鮮卑石室」を発見」で一般向けに紹介されたりした（提示の石刻祝文の拓本は初期公表本同様ながら後年刊の鮮明な版＝文献12による）。さらに1984年には、初報以後の関係文献をほぼ網羅した町田隆吉論文、「北魏太平真君四年拓跋燾石刻祝文をめぐる」が出た（文献6）。町田論文には、後述するように大興安嶺地域の地図に続いて嘎仙洞平面図も先行文献に依拠して示されており有益であるが、本論としては石刻祝文と『魏書』礼志所載祝文、そこに現れる可寒・可敦の称号の検討を主眼としている。ここでは当初の公表に依拠する上述の平面図を示しておこう。

それから30年を経たが、この間に米文平の著書（文献9）を含め、中国・日本の両国で鮮卑の嘎仙洞とその石刻祝文を視野に入れた概論や研究も少なからず公表されてきた。さらに、嘎仙洞そのものや数百キロ範囲の遺跡と関連させ論じるような新見解が、初出・再掲交々地方新聞（インターネット版も含む）に連年掲載されている状況がある。

1つの問題は、鮮卑の、一般に言う祖先窟、当時の記録にある「先帝旧墟」、「石室」その他で表現される遺跡、現在の嘎仙洞が、どうして北魏に



において忘れられ、烏洛侯国によって知らされた後に、どのようにして北魏使者が往還したか、そして窟の基本情報はどのようにもたらされ、また記録されていたかということである。これらの問題にまずもって関係するのは、烏洛侯の分布位置であろう。町田論文で提示されている大興安嶺地域の地図は次に示した左のとおりであり、特段の不都合はない。そこには烏洛侯を含め民族勢力の表示はないが、元になった米文平論文（文献5）の地図は右に示したものである。



米文平論文中の地図に見える烏洛侯の記載位置は、詳細は割愛するが、当時としては実は史料の新解釈に依拠した成果だったともいえる。よく使われる『アジア歴史地図』（平凡社、1966年）では「烏洛侯」の3字を、北緯45度から50度の間、東経120度の東西に跨るように記載しているから、大興安嶺の西から山中、東にもわずかにかかるような理解を導くことにもなる。米文平調査時期に出た『中国史稿地図集』上冊（地図出版社、1979年）では、「烏洛侯」を東経120度以西、大興安嶺の西で呼倫湖の東から南にかけて記載している。これに対して、嘎仙洞＝石室の発見から一両年のうちに編集を終えたと推測される『中国歴史地図集』第四冊（地図出版社、1982年）は、2か所（19-20「齊 魏時期全図」と60「柔然等部」）で大興安嶺（山脈）の記載と嫩江の間に「烏洛侯」を記入している。このうち1か所（19-20）では、北緯50度より少し北、東経123度あたり、嫩江へ西側から合する一支流の上流北側に、発見の成果を盛り込んだ丸印と「石室」を明記している。嘎仙洞の位置は北緯50度38分、東経123度36分とされていて、その情報把握もすでに反映されていたのである。

以上の状況と、米文平論文中の地図における「烏洛侯」配置の斬新さのためもあったか、町田論文では民族分布を未記載としているが、米文平に依拠して問題はなかったとも考えられる。すなわち、鮮卑・北魏が忘れた石室は大興安嶺北部の山中主脈より東側、烏洛侯の西北にあったと同時に、鮮卑は移動に際しておそらく大興安嶺西側に出て下り、石室から離れるにしたがって遡上して辿り帰ることが困難となり、最終的に認識対象外になったのであろう。一方烏洛侯は、分布範囲内外で、西北への支流を遡上し、伝承対象・好奇心対象として認知を維持していたか、あるいはルートや勢力の開拓を試みて発見したために、石室を認識していたと推測されよう。

烏洛侯国が遣使して北魏に来たのは太平真君4年（443年）「三月…壬戌〔22日〕」（『魏書』巻4下、『資治通鑑』巻124）、石室の存在を伝えられ李敞らが現地へ赴くには烏洛侯の使者の同伴が

必要で、それゆえにそのルートも大興安嶺東麓の烏洛侯の勢力範囲を経るものだろう。そして発見された祝文冒頭に「維太平真君四年癸未歲七月廿五日」とあってこの間に閏月はないから、烏洛侯国使者の滞在期間と同行出発後の北魏使者の往路日数に現地到着後の刻文完成・祭祀予定日までを加えると3か月強となる。刻文用文面は李敞らが持参したが、実際の刻文冒頭は現地で確定したのだろう。この冒頭部分に加え4行目あたりまでは、往還後に伝えられたかもしれないが、今は1行目が現地確定・現地残存で他は不明としよう。石室の規模が烏洛侯国使者によってほぼ正確に伝達され記録されるのは不可思議だから、それは北魏使者の往還による情報だろう。

その規模は、『魏書』烏洛侯国伝に「南北九十歩、東西四十歩、高七十尺」とあり、礼志にはないが『北史』巻94烏洛侯伝、『通典』巻200辺防・北狄・烏洛侯、『太平寰宇記』巻199四夷・北狄・烏洛侯でも同様である。ただ既言及の『資治通鑑』のみ「高七十尺、深九十歩」としている。11世紀後半、1084年成立の『資治通鑑』の記載は、言及した他の史料のほぼ全部を見た上での記載かとも思われるが、なぜ「南北」「東西」を削除して「深」としたのか、この点については扱われていないようである。

想像を逞しくすれば、この背景には宮内庁書陵部所蔵で『北宋版 通典』（汲古書院、1980～1981年）として刊行された史料と同系統の記載が関係しているとも疑われる。『北宋版 通典』には後の補写部分があるとされ、関係する巻200烏洛侯の箇所もまさにそれに当たるが、そこには石室の規模に関して「南北九十歩、東西十四歩、高七十尺」とあると同時に、太武帝「遣中書侍郎李敞告祭焉、刻祝文於石室之北而還。」ともある。引用の前者中の「十四歩」は「四十歩」に訂正して読めばよい。後者部分で「刻」は『資治通鑑』に見え、『魏書』烏洛侯国伝、『北史』、『太平寰宇記』は「刊」、「石室」は諸史料で「石室」と「室」に分かれるが大きな問題ではなからう。問題は刻文の場所が「石室之北」とあることで、他の諸史料はすべて「(石)室之壁」となっている。おそらく『資治通鑑』は「石室之北」というこの『北宋版 通典』の系統の史料を見たと同時に、「南北九十歩」「東西十四〔訂正すれば四十〕歩」ではイメージしにくく、「石室之北」では最奥の暗い場所に祝文を刻したことになり、迷った末に「南北」「東西」を削除し、数値の大きな方を残して「深九十歩」とし、「石室」をも削ったため、「高七十尺、深九十歩、…刻祝文於壁而還」という記載になったと思われるのである。

それでは「石室之北」、すなわち北壁に刻したのは事実かという確認になるが、提示した平面図のように、石室は南に開きながらも北北東に深く伸びていて、入口から見て正面の北壁とも言える突き出た場所に刻文がある。なお「石室之北」の表現は、米文平著書（文献9、44頁）で『黒龍江通志綱要』金石志の記載に言及し、そこで『魏書』の言及を踏まえながらも『北宋版 通典』烏洛侯の記載から「焉」1字を脱した文を載せ、「実為黒龍江石刻見於史伝之始。惜今已無可考。」との記載までを引用している。『北宋版 通典』以外にも、「石室之北」、まさに「北」壁に祝文を刻したという史料がかつては存在した可能性もあると考えられよう。

すなわち、北魏の使者の往還の結果もたらされた情報としては、祝文本文に刻文時に加えられたはずの冒頭部分の年月日は不明としても、石室の規模に関わる数値の他、刻文の位置についても含め想定してよからう。

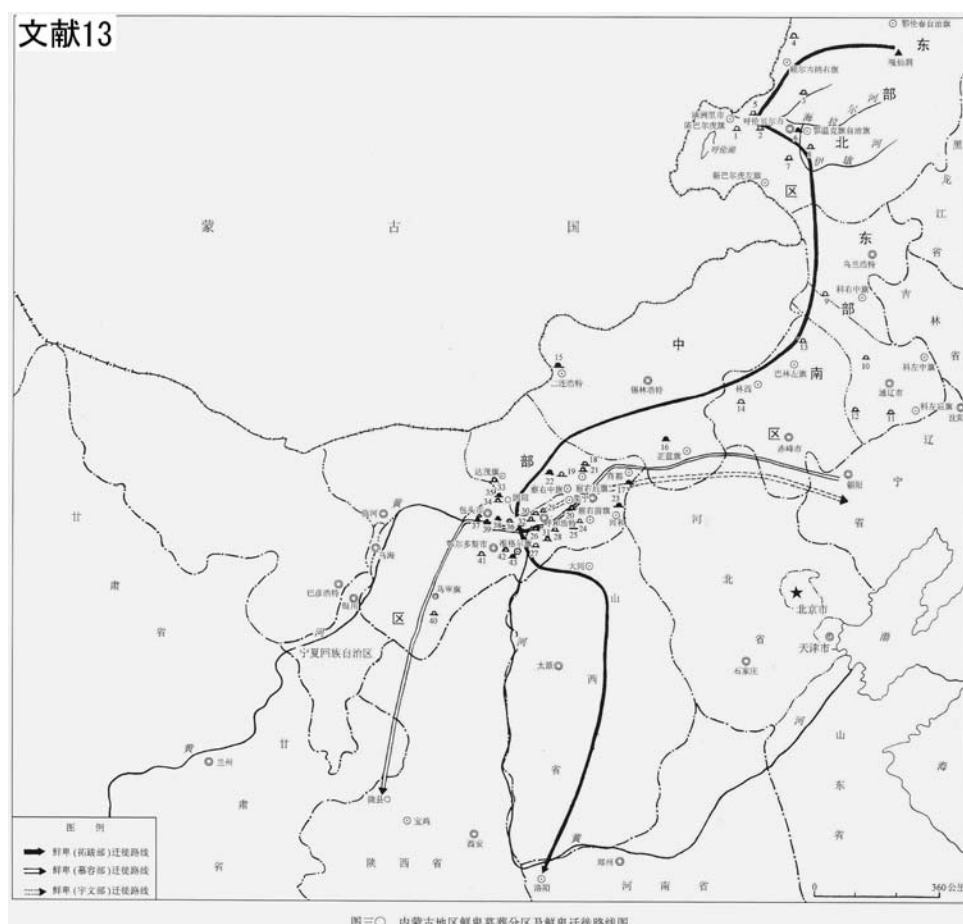
以上、鮮卑の祖先窟、石室に関する北魏使者の大興安嶺東側、烏洛侯国經由往還後の複数の情

報があり、それらは石室の発見によりほぼ証明されるという人流と情報伝達の側面を指摘した。

3. 鮮卑の南下と柔然の勢力と祖先窟をめぐる問題

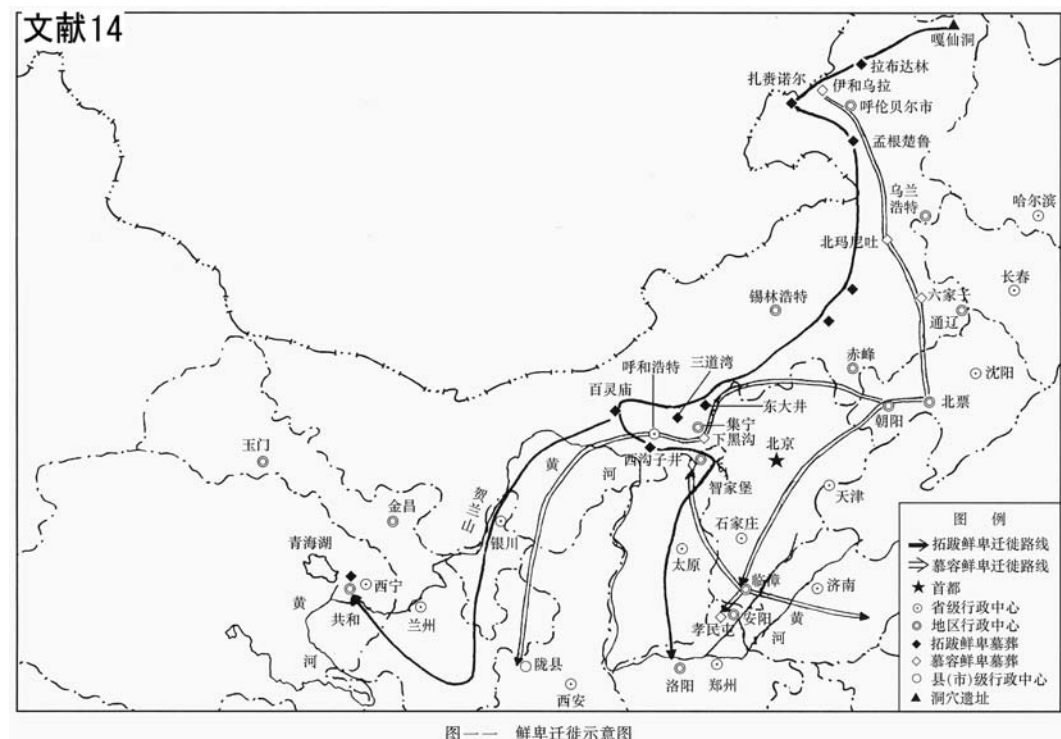
北魏の使者が鮮卑の祖先窟、石室まで往復した背景と記録に検討を加えたことに関連して、祖先窟方面からの鮮卑の南下の問題があった。鮮卑全体の南下の時期やルートについては、ひとまとまりとして直線的に示することができるか否かの問題もある。祖先窟に関わる集団の方向性については先に、大興安嶺の西側に出て下り、徐々に祖先窟から離れたのだらうと言及しておいた。ところが、その方向性に深く関係する近年の考古学的成果とその解釈の提示がすでにある。

1930年代の日本人による内蒙古鮮卑墓葬の発掘から60余年を経た今世紀初め、新中国の内蒙古自治区文物考古研究所成立50周年を機とする2004年に、拓跋鮮卑を中心に関係墓葬を総合的に検討した孫危・魏堅の成果が研究報告集で公表された。そこでは、紀元前1世紀末からが第一期、以後も順次区分があり5世紀前半から6世紀前半までが第五期とされ、拓跋・慕容・宇文諸部の南遷ルートが、嘎仙洞も含め次の図のように示されている（文献13、234-235頁間の折込）。白記号の墓葬は既公表、黒記号は該報告集公表の墓葬である（文献13、213頁図1と対応）。



『魏書』卷1序紀の「大澤」すなわち呼倫湖の近辺に第一期の諸墓葬を認め、他の個別墓葬も包括的に画期した上での南遷ルート提示には、相当程度重いものがある。

さらにそれから少し後の2007年には、先の共著者の1人の孫危が再度鮮卑とその関連遺跡の全体の様相把握を示した上で、南下についても一步進めた解釈を出した。そこではまず、拓跋鮮卑についてその紀元前1世紀末からを第一期、以後も順次設定して5世紀初めから6世紀前半までを第五期としつつ、次に慕容鮮卑についても同時期を第一期、最後は4世紀前半から5世紀初めを第五期とするようにそれぞれ画期し、鮮卑のそれら両勢力ごとの南遷ルートに追加と延長を加えて明示した図が提示されたのである（文献14、61頁）。これも次に示しておこう。



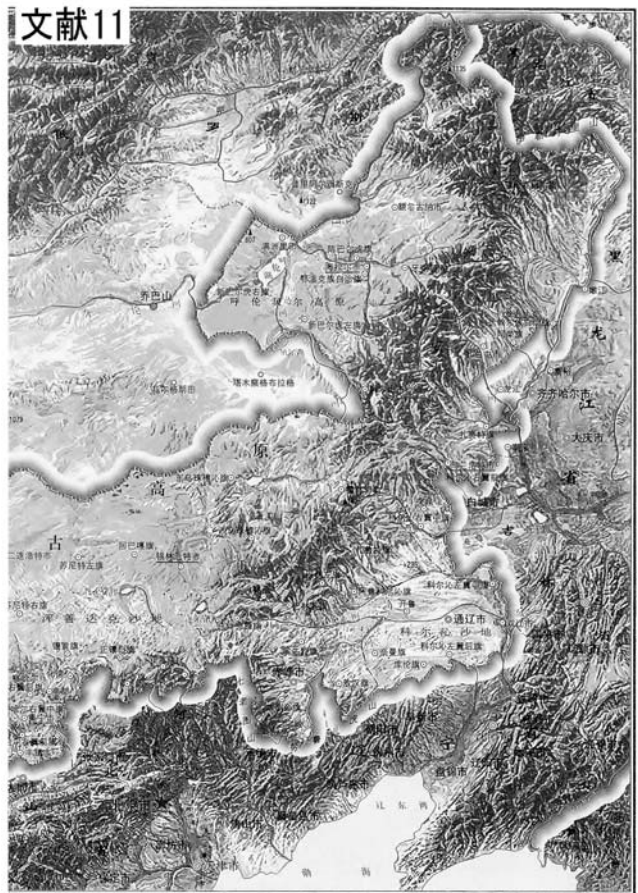
鮮卑の南遷ルートの相次ぐ提示は極めて興味深いものだが、その賛否にはなお検討すべき問題が少なくない。これらの図に関連して中堅研究者と意見交換を試みる中で、さらなる検討点の教示を得た。特に急いで文章化する予定はない個人的指摘とこのこと、筆者の責任で教示者の名を示さないまま指摘の理解したところをまとめれば、以下のようになる。

すなわち、鮮卑の南遷ルートに関わる遺跡分布の認識、考古学的発掘や文化史的研究の成果は、今のところ中国からの発信に依拠せざるをえない状況がある一方、その範囲や南下ルートの想定に関わる地域は、中国から見てモンゴル国との国境に極めて近い。したがって本来ならば一国の考古学的成果や認識だけではなく、隣接するモンゴル国側の考古学的成果も合わせ参照する必要がある。ところがモンゴル国における鮮卑時期に属する考古学的成果がまったくか、あるいはほとんどないらしい。このような状況下、国境線の東・南の中国側資料だけで議論せざるをえない、このことを認識する必要がある。さらに、モンゴル国側の鮮卑遺跡が鮮卑外のものとされている

ことの有無も再考すべきであろう。国境線を跨いでありうる様々なルートの想定（宿白1977年論文中の図＝文献17、175頁再録）、国境線に惑わされない考察、これらが必要というのである。

これらの指摘は、次に示す地形と国境を含む地図（文献11、地図2右）も参照すれば、説得力があるものと頷ける。大興安嶺山脈の西側に出て呼倫湖近辺から南下する場合、現在の国境の中国領域に沿って東南進、その後南進、西南進するのは、『魏書』序紀の伝説的記載中の困難、「山谷高深、九難八阻」に通じるが、地理的に自然な山脈西側から開けた平原に向かって西進、現在の国境を越える南下が可能だったとも疑われる。

同時に、4世紀後半まではかなり史料不足の感があるが、まさにその時期に至る、モンゴル東部大興安嶺西麓付近における匈奴や柔然の勢力の想定や理解が1つの鍵となる。しかしその変遷の把握は、史料上の制約により時期・領域とも断定はほとんど困難だろう（文献1、他）。5世紀前半の柔然・北魏関係史の中で両勢力の範囲を考えても容易ではないが（文献7、他）、呼倫湖のすぐ南の現在の中国内蒙古地域から、さらに南の現モンゴル国領を通り、再度越境して内蒙古に入り東烏珠穆沁旗（烏里雅斯太鎮）方面に至る南北



の地域は、特段の障害がなければ自然な南下ルートになりうる。先に言及した『中国歴史地図集』第四冊の2か所でもその地域を柔然の領域とはせず、その地域内の南部に地豆于が記入されている。この地豆于の勢力分布は、すでに示した米文平地図（文献5）中の位置よりもやや西だが、柔然と接しているのがおそらく正しい（文献2、185頁）。

いずれにしても鮮卑の南下は、考古学的成果と国境の問題に加え柔然勢力の歴史・地理にもある程度関係があり、地豆于の位置問題で北魏使者が祖先窟まで往復した440年代も同様である。

なお2002年、嘎仙洞北（西）壁祝文対面の東壁で新刻文が発見され大胆な解釈が出た（文献12、王立民2003年論文＝文献17、259～263頁再録）。新刻文と祖先窟継続修造を扱った論もあり（温玉成2011年論文＝文献17、264～275頁再録）、北魏・祖先窟間往復は複数回とも疑われる。

4. 突厥の祖先伝承、隋初期の突厥の東西分裂（583年）と祖先窟

6世紀半ばにアルタイ山脈西南から興こり、柔然を倒して北アジアを統一（552年）、中央アジアにも跨る勢力をもった突厥には、複数の祖先伝承がある。『（北）周書』巻50異域伝下・突厥にも見えるその祖先伝承の1つには、牝狼が高昌国の北の山の洞穴中で十男を生み、各々1姓をもちその1つが突厥の阿史那氏だという記載がある。後段には、君主たる可汗は「毎歳率諸貴人、祭其先窟。」とし、続けて「又以五月中旬、集他人水、拝祭天神。」と記しているから、祖先窟祭祀と天神祭祀があったと判明する。

突厥は急速にその領域を拡大したものの成立直後の隋の離間策もあって583年に分裂し、以後は（東）突厥（または北突厥）・西突厥と区別して呼ばれている。隋初の突厥の東西分裂に関連して、『隋書』巻84北狄伝・突厥、すなわち東突厥の記載においては、「五月中」の「祭天」が確認される。一方、続く同伝・西突厥には、「每五月八日、相聚祭神、歳遣重臣向其先世所居之窟致祭焉。」とある。祭天、祭神は双方に記されているが、祖先窟祭祀が西突厥だけに見えることについては、高昌国の北の山に関わるはずのその所在地が、必ずや西突厥の領域になったためだったと解釈する松田寿男

論文（「突厥勃興史論」＝文献3所収）があり、その所説は傾聴に値すると思われる（筆者執筆概説中の地図「6世紀末の北アジア」参照＝『民族の世界史4 中央ユーラシアの世界』山川出版社、1990年、113頁）。



史書における天神祭

祀と祖先窟祭祀という2つの伝承の記載、それらの情報源の伝達経緯については、南北朝末期から隋、唐初の中国王朝と突厥との交流、使者往来の諸研究（文献10、他）においても、詳細な説明はなされていない。一方で「五月八日」という具体的記載があるから、必ずや突厥人発の情報があったはずであるが、他方で中国王朝側が「牝狼」から続く記載の山・洞穴、それが祖先窟だとしていることを知ると、記すべき伝承として記してはいるものの、それ以上の確認も使者の往来・関与もなかったのであろう。これが、突厥の祖先窟に関する伝承と鮮卑の祖先窟の伝達における、最大の差異だと言えよう。王朝としての関心と使者往来の有無が、実際の祖先窟の発見と未発見を分けていると同時に、記録を載せた史書の信憑性にも影響を与えていることになる。現時点で突厥の祖先窟の発見があり得ないとは考えない所以である。

5. おわりに

以上、鮮卑の祖先窟に関わる史書の記載から現地調査によるその発見確定、それと関係する諸問題について、研究史の一部を意識し、また歴史・地理的問題、鮮卑の南下や周辺勢力との関係を意識しつつ扱った。現時点で扱える問題点の整理を試み、今後の検討を期する意味も込めようとしたが、それゆえに問題提起の段階にあるとも言える。さらに突厥の祭祀や祖先伝承、祖先窟についても、これまでの諸指摘を含め概観的に扱ったが、こちらの問題については祖先窟そのものが未発見ゆえに、特段の新指摘には至っていない。

5～6世紀の東ユーラシア地域における人流や情報伝達を考える際に、ここで扱った問題も共有され、今後新指摘が現れることに期待したい。

【主要参考文献】

1. 中国科学院歴史研究所史料編纂組編『柔然資料輯録』中華書局、1962年
2. 白鳥庫吉『白鳥庫吉全集』第四卷、岩波書店、1970年
3. 松田寿男『古代天山の歴史地理学的研究増補版』早稲田大学出版部、1970年
4. 内田吟風『北アジア史研究鮮卑柔然突厥篇』同朋舎、1975年
5. 米文平『鮮卑石室所関諸地理問題』『民族研究』1982年第4期
6. 町田隆吉「北魏太平真君四年拓跋燾石刻祝文をめぐって―「可寒」・「可敦」の称号を中心として―」『アジア諸民族における社会と文化』国書刊行会、1984年
7. 潘國鍵『北魏與蠕蠕關係研究』台湾商務印書館、1988年
8. 河野六郎研究代表『三国志に記された東アジアの言語および民族に関する基礎的研究』平成2・3・4年度科学研究費補助金一般研究（B）研究成果報告書、1993年
9. 米文平『鮮卑石室尋訪記』山東畫報出版社、1997年
10. 李大龍『唐朝和辺疆民族使者往来研究』黒龍江教育出版社、2001年
11. 訾冬梅・高秀静主編『内蒙古自治区地図冊』中国地図出版社、2001年
12. 王立民主編『嘎仙洞西壁摩崖刻石』黒龍江美術出版社、2003年
13. 魏堅主編『内蒙古地区鮮卑墓葬の発現与研究』科学出版社、2004年
14. 孫危『鮮卑考古学文化研究』科学出版社、2007年
15. 金子修一『中国古代皇帝祭祀の研究』岩波書店、2006年
16. 金昭・阿勒得爾図主編『走出石窟的北魏王朝』上巻、文化芸術出版社、2010年
17. 王巖・孟松林主編『呼倫貝爾民族文物考古研究』第一輯、科学出版社、2013年

付記 本稿はシンポジウム当日の報告に基づき、必要と思われる修正・追加を含めたものである。

なお、冒頭で予定した7・8世紀における突厥の名や関係情報の日本への伝播については、当日の配付資料で一部を示したが十分に扱うことができなかった。これに関しては、“Some Notes for the Japanese Records and Information on the Turk”と題する英文報告（トルコ共和国イスタンブールのボアジチ大学で2012年6月に開催されたシンポジウム Japan on the Silk Road の報告書、Brill 近刊予定）の前半部分で関係史料を示して扱っている。